

大学生の子ども観と内的作業モデルおよび 志望職種との関係

Correlation between Views of Young Children and the Internal Working
Model and Occupational Aspiration of University Students

河野順子*, 伊藤由梨奈**

Junko KAWANO, Yurina ITO

キーワード：子ども観, 内的作業モデル, 志望職種

Keyword : internal working model, occupational aspiration, views of young children

要約

本研究は、大学生がどのような子ども観をもっているのかを明らかにし、子ども観に関与する要因として、内的作業モデルと志望職種を仮定して検討することを目的とした。子ども観は、「有能・感性豊かな存在」「自己統制の脆弱な存在」「楽しく・明るい存在」の3因子から構成されていた。保育者志望の学生は「有能・感性豊かな存在」ととらえる傾向にあった。また、内的作業モデルの安定型は「有能・感性豊かな存在」に、回避型とアンビバレント型は「自己統制の脆弱な存在」に、有意な影響を与えていた。回避型は「有能・感性豊かな存在」に影響を与える傾向にあった。

Abstract

The study aims to identify the views held by university students of young children, investigating the factors that affect their views based on the internal working model and the individual's occupational aspirations. The students' occupational aspiration was categorized in two groups: childcare related work and non-childcare related work. Their views of young children were found to be characterized by notions such as “young children are sensitive and full of potential,” “they are poor at self-control,” “they are full of fun and cheerful,” and “they are pure.” The students who wanted to be a childcare professional tended to give a higher score regarding the notion of young children being “sensitive and full of potential,” compared to those who wanted to work in the non-childcare sector. In addition, a significantly positive

partial correlation was found for the notion of “sensitive and full of potential” among the students who were identified as secure types in the internal working model, while a tendency of negative partial correlation was found among those identified as avoidant types. The students who are avoidant type and ambivalent type showed a significantly positive partial correlation with the notion of children being “poor at self-control.” Based on these findings, the study discusses the factors influencing views of young children.

問題と目的

将来、保育者を志望する学生に志望理由を尋ねると、「子どもが好きだから」と回答する学生が多い。この回答の背景には、学生なりの子どものとらえ方、すなわち、子ども観が存在するであろう。子ども観とは「人が子どもをどのような存在としてとらえているのか」と定義される（嘉数・島袋・當山・喜友名・友利・廣瀬, 1997; 星野・日潟・吉田, 2008; 滝口, 2011）。子ども観に関する研究は、保育者志望の学生・教師志望の学生といった職業志向性や子どもとのかかわり程度による子ども観の相違を明らかにする研究（嘉数ら, 1997; 星野ら, 2008）、主に保育専攻の学生を対象として実習前後の子ども観の変容を追跡する研究（松永・坪井・田中・伊藤, 2002）や保育者養成系4年生大学生の保育観・子ども観についての経年変化を縦断的に確認する研究（宮沢・増出, 2008; 増出・宮沢, 2009）などが蓄積されている。子ども観について、嘉数ら（1997）は保育科短大生119名を対象として保育職への志望度の違いによる子ども観の相違を検討した調査で、保育職を志望する群の方が志望しない群よりも、子どもをいとおしく個性的な存在として肯定的にとらえていることを明らかにしている。松永ら（2002）は、実習前後の子ども観の変容について、実習前の子ども観は、「かわいい」「元気な」「養護的」といった、情緒的レベルでの理想化されたイメージが多かったが、実習後は、「個別性」「有能性」など保育の専門性にかかわる子ども観に変化していたことを見出している。また、宮沢ら（2008）は保育者養成課程の大学生を対象として、入学後3年間の子ども観の変容を縦断的に分析した結果、自立的自発的存在という子ども観が経年によって有意に高くなっていることを見出し、その背景に実習の効果が影響していることを示唆している。滝口（2011）は、教育学部の学部1年生を対象に、専攻コースによって、子ども観に相違が認められるかどうかを検討した結果、子ども観の中でも、肯定的な評価については明確な相違は認められなかったが、否定的な評価については、コース間に差が認められたとしている。具体的には、幼児教育コースや家政教育コースなど幼児とのかかわりを必要とするコースの学生よりも、幼児とのかかわりをあまり必要としないコースを専攻する学生の方が否定的に評価していた。滝口（2011）の結果は、子どもとのかかわりに対する志向性と子ども観には関連があることを示唆している。このように、子ども観の特徴が明らかになってきたことで、実習に関連する教育プログラムの構築や学生の学びの効果の検討が進むことが期待されている。

以上のように、子ども観に関する先行研究から、専攻コースや実習経験といった子どもとのかかわりの必要性や程度によって、子ども観が影響を受けることが示されたといえる。しかし、子ども観に関与する個人内特性に関する要因について検討がなされている研究は見当たらない。この点を踏まえ、本研究では、子ども観に関与する個人内変数としてアタッチメントの内的作業モデルをとりあげる。坂上（2005）は、内的作業モデルについて、Bowlby（1969, 1973）を引用し、子どもがアタッチメント対象との相互作用を通して、周囲の世界がどのようなものであるのか、母親や他の重要な人物がどのようにふるまうのか、自分自身がどうふるまうのか、といった、自己と他者および周囲の世界に関して構築する表象モデルであると定義している。内的作業モデルは、1つのテンプレートとして様々な対人関係に運用され（数井・遠藤・田中・坂上・菅沼, 2000）、出来事を知覚・解釈し、そこでの自分自身の対人行動を決定する基盤となるとされる。このような特質の内的作業モデルは、子どもの存在をとらえる際にとらえ方の枠組みとなり、子どもをどのように受け止め、子どもとの行動をどのように取るかを決定する基盤として機能すると推測される。これから、職業人としてあるいは親として子どもとのかかわる際に、どのような枠組みで子どもを捉える傾向があるかを知っていることは、適切な対子ども行動に寄与すると考える。戸田（2001）によると、成人の内的作業モデルは、乳幼児期の愛着パターン、すなわち、安定型、回避型、アンビバレント型に対応した3つのパターンで把握される。そして、内的作業モデルの安定型は、他者は応答的で自己は援助される価値のある存在という表象をもち、回避型は、他者は拒否的で援助が期待できないことからこれを補完するために極めて自己充足的な存在という自己に関する表象をもつとしている。また、アンビバレント型は、他者に対して信頼と不信のアンビバレントな表象をもち、自己不全感が強いとしている。先に述べたように、内的作業モデルが子どもにとらえ方の枠組みとして機能すると考えられるため、これら3つのパターンの内的作業モデルによって子どもをとらえる場合、次の仮説が考えられる。内的作業モデルが安定型で個人が愛着対象との間で応答的で相互的なやり取りを経験していれば、他者は自分に応答的で自分は援助される価値のある存在であるという安定的な愛着の内的作業モデルをもつため、子ども観も他者に対して応答的な特性を備え、他者の援助を引き出すような特性をもつ存在といった特徴となるものと考えられる（仮説1）。回避型の場合は、他者を拒否し自分を回避する存在と捉えるため、子ども観も他者から拒否されるような特性をもつ存在といった特徴となるものと考えられる（仮説2）。アンビバレント型は、他者は応答的であったり拒否したりといった不安定な表象をもつため、子どもは、他者の一貫した応答性を引き出すような行動を取る存在として捉えるものと考えられる（仮説3）。

また、滝口（2011）で示されたように、子どもとのかかわりに対する志向性も子ども観に関与する要因として取り上げる。子どもとのかかわりに対する志向性が高いと考えられる保育者志望者その他の職業志望者との子ども観には相違があることが予想される。

以上のことから、本研究は、大学生の子ども観に関与する要因として、個人変数としての内的作業モデルと志望職種を想定し、内的作業モデルと子ども観の関係に関する仮説を検証すること、加えて、志望職種によって子ども観に相違が認められるか否かを検討することを目的とした。

方 法

1. **調査協力者** 大学生 165 名（男性 50 名、女性 106 名、性別記入無 9 名）を調査協力者とした。平均年齢は、19.42 歳（標準偏差 1.47、年齢範囲 18 歳～31 歳）であった。
2. **調査期間** 2015 年 7 月初旬に実施した。
3. **手 続 き** 調査は授業終了後に行った。授業の担当教員が実施し回収を行った。調査に際しては、研究倫理を踏まえ、強制ではないこと、調査以外の目的で使用しないことを質問紙に明記したうえで、口頭でも説明した。回収時に提出したことで了解を得たものとした。なお、本研究は学内研究倫理委員会の審査で承認を得ている（承認番号：28-12）。
4. **調査内容** 子ども観を測定する調査に関しては、滝口（2011）の調査項目 40 項目を、5 件法（1：全く当てはまらない～5：非常に当てはまる）で回答を求めた。その際に、1 歳から 6 歳までの幼児期の子どもを想定するように求めた。内的作業モデル尺度は、戸田（2001）に記載されている戸田（1988）によって開発された 18 項目を使用し、6 件法（1：全く当てはまらない～6：非常によくあてはまる）で回答を求めた。この尺度は、成人の内的作業モデルを乳幼児期の愛着パターンである「安定型」「回避方」「アンビパレント型」に対応した 3 パターンで測定するものである。3 パターンに分類された項目を合計して、各パターンの合計得点とした。また、基本属性として、性別、年齢、所属学科、所属専攻を尋ねた。これらの基本属性のうち、所属学科と所属専攻の特性によって、0 歳から 6 歳までの子どもと接する職業に就こうとする保育専攻の学生を保育者志望の学生、その他の学科、専攻の学生をその他の職業を志望する学生として分類した。

結 果

1. 大学生の子ども観の因子構造

子ども観尺度 40 項目（滝口，2011）について、調査対象者が異なるため、改めて主因子法プロマックス回転による因子分析を行った。

因子負荷量が .40 以上を基準として因子分析を行い、解釈のしやすさから 3 因子 30 項目を抽出した（表 1）。第 1 因子は、「想像力がある」「創造力がある」「なんでも吸収する」「感性が豊かである」「かわいい」「素直である」など 13 項目により構成されており、子どもの能力や感性に関する内容であると解釈できるため、「有能・感性豊かな存在」因子と命名された。第 2 因子は、「こちらの意思を理解しない」「さわがしい」「落ち着きがない」「乱暴である」「集団行動がとれない」

表 1. 子ども観尺度の因子分析結果

	因子		
	1	2	3
第1因子 有能・感性豊か ($\alpha = .863$)			
35 大人の様子をよく見ている	.824	.078	-.287
28 想像力がある	.719	.037	.005
33 かわいい	.622	-.096	.069
9 創造力がある	.605	.008	-.032
37 好奇心旺盛である	.592	.136	.133
24 感性が豊かである	.532	-.005	.222
40 素直である	.519	-.171	.234
38 大人が教えなければ何もできない	-.515	.348	.164
6 ひとりひとり個性がある	.511	.076	.192
20 無限の可能性を持っている	.444	-.089	.200
13 なんでも吸収する	.426	.190	.138
26 真実を見通す目を持っている	.421	.130	-.124
23 ひとりひとり発達が異なる	.411	-.020	.243
第2因子 自己統制の脆弱性 ($\alpha = .804$)			
30 こちらの意思を理解しない	-.295	.724	.257
39 さわがしい	.110	.651	.215
34 落ち着きがない	.286	.614	.145
29 乱暴である	.038	.597	-.043
4 他人に対する思いやりに欠ける	-.137	.592	-.125
15 集団行動がとれない	.028	.509	-.228
32 不公平なことに敏感である	.472	.497	-.223
14 根気がない	-.001	.479	-.397
11 自己中心的な行動をする	.118	.462	.138
21 ものの見方が狭い	-.106	.440	-.148
25 残酷である	.120	.419	-.152
第3因子 楽しく・明るい ($\alpha = .726$)			
5 いつも楽しそうである	.090	.024	.666
1 明るくのびのびしている	.143	-.042	.619
3 単純である	-.249	.276	.560
18 元気である	.325	.042	.498
22 現実的である	.066	.127	-.429
7 純粋である	.284	-.114	.411
	因子2	-.196	
因子間相関	因子3	.504	-.033

など11項目により構成されており、子どもは自分自身の行動をコントロールすることが容易ではないといった自己統制に関する内容であると解釈できるため、「自己統制の脆弱な存在」因子と命名された。第3因子は、「いつも楽しそうである」「明るくのびのびしている」「元気である」などの6項目より構成されており、子どもの性格の明るさや行動のびやかさと関連すると解釈できるため、「楽しく・明るい存在」因子と命名された。

2. 子ども観と内的作業モデルとの関係

内的作業モデルのタイプについて、「安定型」、「回避型」、「アンビバレント型」のそれぞれの合

計得点を算出した。子ども観は「有能・感性豊かな存在」因子, 「自己統制の脆弱な存在」因子, 「楽しく・明るい存在」因子の3因子についてそれぞれの下位因子得点を算出した。各下位因子得点の平均値と標準偏差および相関係数を表2に示した。内的作業モデルと子ども観との関係をみるために, 内的作業モデルの3因子を説明変数, 子ども観3因子を目的変数として重回帰分析(強制投入法)を行った。表3に重回帰分析の結果を示した。

表2. 各因子の記述統計量と相関係数

	度数	平均値	標準偏差	安定型	アンビバ レント型	回避型	有能・感性 豊か	自己統制の 脆弱性	楽しく・明 るい
安定型	150	19.13	4.88						
アンビバレント型	154	21.51	5.26	-.128					
回避型	155	19.09	4.59	.020	.164*				
有能・感性豊か	155	47.81	7.81	.198*	-.155	-.144			
自己統制の脆弱性	154	34.21	6.22	-.012	.305**	.342**	-.138		
楽しく・明るい	154	21.75	3.91	.081	-.020	-.124	.563**	-.066	

* $p < .05$, ** $p < .01$

「有能・感性豊かな存在」因子を目的変数とした場合, 安定型から有意な正の影響($\beta = .184$, $p < .05$)を受け, 回避型から負の影響を受ける傾向($\beta = -.155$, $.05 < p < .10$)が認められた。「自己統制の脆弱な存在」因子を目的変数とした場合, 回避型($\beta = .284$, $p < .001$)とアンビバレント型($\beta = .209$, $p < .01$)から有意な正の影響を受けていた。

表3. 内的作業モデルを説明変数, 子ども観3因子を目的変数とした重回帰分析

説明変数	目的変数				
	子ども観				
		有能・感性豊か	自己統制力の脆弱性	楽しく明るい	
安定型	(β)	.184*	.018	.086	
回避型	(β)	-.155†	.284***	-.143	
アンビバレント型	(β)	-.104	.209**	.027	
	R^2	.076*	.140***	.026	

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $.05 < p < .10$

3. 志望職種による子ども観の相違

志望する職種によって子ども観に相違があるかどうかを, 志望職種を独立変数, 子ども観を従属変数として t 検定を行った。表4に志望職種別に子ども観3因子の下位因子得点の平均値と標準偏差を示した。 t 検定の結果, 「有能・感性豊かな存在」因子の平均値が, 保育者を志望する学生の方がその他の職業を志望する学生よりも高い傾向が認められた($t(152)=1.967$, $.05 < p < .10$)が, 他の2因子には有意差は認められなかった。

表 4. 志望職種別子ども観 3 因子の平均値と標準偏差

子ども観因子	志望職種	度数	平均値	標準偏差
有能・感性豊か	保育者	57	49.40	8.20
	その他	97	46.86	7.49
自己統制の脆弱性	保育者	57	33.42	6.48
	その他	96	34.69	6.07
楽しく・明るい	保育者	56	21.91	3.69
	その他	97	21.65	4.06

考 察

本研究では、内的作業モデルは子どものイメージをとらえる際に認知的枠組みとして機能するため、個人の内的作業モデルによって子ども観が異なるものと仮定し、内的作業モデルと子ども観との関係を検討すること、志望職種による子ども観の相違について検討すること、の2点を研究目的とした。

1. 内的作業モデルと子ども観との関係

大学生が「子どもをどのようにとらえているか」という子ども観について、子ども観尺度（滝口, 2011）を用いて測定をし因子分析を行った結果、「有能・感性豊かな存在」「自己統制の脆弱な存在」「楽しく・明るい存在」3つの因子が抽出された。

これらのうち、「有能・感性豊かな存在」と命名された因子に対して、安定型の内的作業モデルが有意な正の影響を与えていた。安定型の特性を示す程、子どもが「想像力、創造力、吸収力に富み発達可能性がある」といった有能性をもち合せているというとらえ方や「かわいい、素直、感性豊か」といった情緒的なとらえ方をすることが窺えた。このような子どもの特性は、大人の子どものへの応答的行動および援助行動を引き出すものと考えられる。また、他者からの接近行動を引き出す特性ともいえる。安定型の内的作業モデルを示す者は、乳幼児期に感受性が高く情緒的応答性が豊かな養育者と調和的で円滑な相互交渉を経験している（遠藤・田中, 2005）。そのような経験をしてきた前成人期の大学生が子どもを認知する際に、他者は自分に応答的で自分は援助される価値のある存在であるという安定型の内的作業モデルが活性化されるために、子どもを他者からの応答的行動、援助行動および接近行動を引き出す存在として認知したのと考えられる。したがって、内的作業モデルが安定型であれば、子ども観も他者に対して応答的な特性を備え、他者の援助を引き出すような特性をもつ存在としてとらえるであろうという仮説1は支持されたと言えよう。

回避型は、「有能・感性豊かな存在」に有意とは言えないまでも負の影響を与える傾向にあり、

回避型の特性を示す程、「有能・感性豊かな存在」といった子どものとらえ方になりにくい傾向が示された。さらに、回避型とアンビバレント型の内的作業モデルは、子ども観の「自己統制の脆弱な存在」因子に正の影響を与えており、回避型とアンビバレント型の特性を示す程、「こちらの意思を理解しない」「思いやりに欠ける」「行動に落ち着きがない」「騒がしい」「乱暴である」といったイメージでとらえることが示された。これらの子ども観は、相手との距離感を感じさせたり、否定的な行動をとって注意を引いたりするといった特徴を示している。回避型の内的作業モデルを示す者は、乳幼児の出すシグナルに対して応答をせず、むしろ避けてしまうといった特性をもつ養育者の対応であったため、他者は拒否的で援助が期待できないととらえ、他者に接近するよりも一定の距離を置く（遠藤・田中，2005）といった特性をもつとされる。したがって、子どものとらえ方も、回避型の内的作業モデルが活性化され、他者から拒否され、他者からの援助を引き出すことができにくいような特性をもつ存在として認知されたものと推測される。このことは、回避型の場合は、他者を拒否し自分を回避する存在と捉えるため、子ども観も他者から拒否されるような特性をもつ存在といった特徴となるであろうという仮説2を支持したものと言えよう。また、アンビバレント型の内的作業モデルを示す者は、自分の出すシグナルに対して、養育者の対応が応答的であったり拒否的であったりと不安定で一貫性に欠けていた（遠藤・田中，2005）ために、養育者からの応答を得るために他者の注意を引こうとするような行動をとる特性をもつとされる。したがって、子どもを認知する際にも、不安定な内的作業モデルが活性化され、「さわがしい」「落ち着きがない」など、他者の注意を引いたり、関心をひきつけたりするシグナルを発信する特性をもつ存在として認知したものと考えられる。このことは、アンビバレント型は、他者は応答的であったり拒否したりといった不安定な表象をもつため、子どもを他者の一貫した応答性を引き出すような行動を取る存在として捉えるであろうという仮説3を支持するものと言えよう。

しかし、内的作業モデルは、「楽しい・明るい存在」といった子ども観には、有意な影響を与えていなかった。この結果から、この因子に含まれる、「いつも楽しそうである」「明るくのびのびしている」「単純である」「元気である」などの子どもの特性が、安定型、回避型およびアンビバレント型のいずれの内的作業モデルも活性化する刺激特性ではなかったことが推測される。したがって、内的作業モデルは、他者の応答性、援助性や拒否感といった情動に関する認知の枠組みとして機能するが、刺激の特性によっては機能しない場合があると考えられる。

2. 志望職種と子ども観との関係

子ども観に関する先行研究では、専攻コースや実習経験といった子どもとのかかわりの必要性や程度が高い方が、肯定的な子ども観をもつことが示されている。そこで、子どもとのかかわりが必須の保育者を志望する学生とそれ以外の職種を志望する学生との子ども観の相違をみたこ

ろ、保育者を志望する学生の方がその他の職業を志望する学生よりも「有能・感性豊かな存在」であると評定する傾向が認められた。明らかな相違は認められなかったが、子どもとのかかわりを志向する学生は安定型の内的作業モデルをもつ傾向にあることが予想され、今後この観点からの検討が求められる。

おわりに

本研究の結果は、子どもを捉える際に、子どもからの情報をどのように解釈して評価するかといった対人情報処理の仕方が内的作業モデルによって異なることを示唆した。戸田(1991)は、内的作業モデルは個人の安全感を得られるように解釈・評価し、後の行動プランを立てるための認知的ルールとして機能していると想定している。本研究は、大学生が子どもの情報を解釈し評価するといったとらえ方に内的作業モデルが機能する可能性を示唆したものと思われるが、解釈・評価後どのような行動プランを立てるのかについて検討するまでには至らなかった。今後は、若者が養育的立場の大人として、子どもにどのようにかかわるのかといった行動的側面に関する検討が課題と考える。例えば、保育士の子どもへの対応、若者が子どもを希望するかどうかといった選択行動などと内的作業モデルとの関連を明らかにすることが挙げられる。乳幼児期に形成されるアタッチメントスタイルが後に内在化された内的作業モデルとして、対人場面で他者からの情報を処理する際に活性化する認知パターンとして機能することの重要性に着目すると、子どもが安定的なアタッチメントスタイルを形成し内在化できるように他者との相互交渉環境を整える必要がある。そうすることは、乳幼児の現在および未来の心理的安定やその後の成長に伴って求められる対人関係形成に寄与するものと考えられる。

引用文献

- 遠藤利彦・田中亜希子(2005), 数井みゆき・遠藤利彦(編著), アタッチメントの個人差とその測定, アタッチメント-生涯にわたる絆-, ミネルヴァ書房, pp.49-67.
- 星野修一・日潟淳子・吉田圭吾(2008), 大学生における子ども観に関する一考察, 神戸大学大学院人間発達環境研究科紀要, 2(1), pp.33-42.
- 嘉数朝子・島袋恒男・當山りえ・喜友名静子・友利久子・廣瀬真喜子(1997), 大学生の「子ども観」に関する研究 保育職志望度との関連で, 琉球大学教育学部紀要第一部・第二部, 51, pp.207-213.
- 数井みゆき・遠藤利彦・田中亜希子・坂上裕子・菅沼真樹(2000), 日本人母子における愛着の世代間伝達, 教育心理学研究, 48, pp.323-332.
- 増出公男・宮沢秀次(2009), 保育者養成課程大学生の保育観・子ども観に関する縦断的研究Ⅲ, 日本教育心理学会第51回総会, p.122.
- 松永しのぶ・坪井寿子・田中奈緒子・伊藤嘉奈子(2002), 保育実習が学生の子どもの観, 保育士感におよぼす影響, 鎌倉女子大学紀要, 第9号, pp.23-33.
- 宮沢秀次・増出公男(2008), 保育者養成課程大学生の保育観と子ども観に関する縦断的分析, 日本教育心理

学会第50回総会, p.121.

坂上裕子 (2005), 数井みゆき・遠藤利彦 (編著), アタッチメントの発達を支える内的作業モデル, アタッチメント-生涯にわたる絆-, ミネルヴァ書房, pp.32-40.

滝口圭子 (2011), 教育学部学生の子ども観は所属コースによってことなるのか-大学一年生を対象とした質問紙調査-, 重大学教育学部紀要, 自然科学・人文科学・社会科学・教育科学, 62, pp.283-292.

戸田弘二 (1991), Internal Working Model 研究の展望, 北海道大学教育学部紀要, 55, pp.133-143.

戸田弘二 (2001), 堀陽道 (監修), 吉田富士雄 (編), 内的作業モデル尺度, 心理測定尺度集II, サイエンス社, pp.109-113.

参考文献

Bowlby, J. (1969/1982), Attachment, Attachment and loss. Vol.1. (= 1976, 黒田実郎・大羽葵・岡田洋子・黒田聖一, 母子関係の理論 I 愛着行動, 岩崎学術出版社.)

Bowlby, J. (1973), Separation, Attachment and loss. Vol.2. (= 1977, 黒田実郎・黒田洋子・吉田恒子, 母子関係の理論 II 分離不安, 岩崎学術出版社.)